

ロックマンX達と謎の少女型レプリロイド

メリア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロックマンXたちが謎の少女型レプリロイドと世界を救うようなお話です。

にじファンではこれの続編も同時進行で書いていましたが、こちらが完結しないとあちらを書いてもよく分からないことになってしまったので、先にこちらを書きます。それに過去と現在の設定が混じっています。アクセルがいるのにエックスとゼロが隊長だったりします。

目次

設定	1
プロローグ	2
第1話 出会い	3
第2話 ハンターベース	5
第3話 ランク決め	7
第4話 彼女の實力	8
第5話 初めてのイレギュラーハント・・・	10
第6話 シエラの秘密？	12
第7話 シエラの戦う理由	13
第8話 いろいろな魔法？	15
第9話 リルの目的	16
第10話 2人のオリジナル？	18
第11話 リルとシエラの関係	19
第12話 シエラのことについて	20
第13話 予感	23
第14話 裏切り	24
第15話 少年	26
第16話 ナンバーズの秘密	29
第17話 セリアナンバーズ	32

設定

オリキャラの設定です

名前 シエラ

性別 女

性格 エックスとゼロの中間あたり。アクセルといると子供っぽくなる。

任務遂行は得意なほう。

容姿 ロックマンゼロのシエルそっくり。服はシエルの水色版。

能力 空を飛べる（浮かべる）、人間世界と電脳世界を行き来できる。

スタイルを分けて戦える。

その他 新しい少女型レプリロイド。戦闘型レプリロイド。絶望を希望に変える者たちの1人。呼び名はレプリロイドの少女。サイバーエルフは5体持っている。（うち2体はサテライト。でも本人は知らない）S級のイレギュラーハンター。所属は第0特殊部隊。

武器 武術、シールド（自由に変形する）剣、弓。

スタイル 通常スタイル 水色の服で目も水色。

戦闘スタイル 黄色の服で目も黄色。純粋な戦闘型レプリロイド

ドくらい強い。（戦闘型だけど）攻撃系の

魔法も使える。でも基本は剣か弓。

補助スタイル 黄緑色の服に黄緑色の目。補助系と回復系の呪

文（？）が使える。

ロックマンXの設定は今と昔が混じってます・・・（例アクセルがいるのに、エックスが第17精鋭部隊の隊長だったりします）

プロローグ

一体いつまで追われなくてはいけないの？

どうして私だけがこんな力を持っているの？

全てのレプリロイドのプロトタイプだから？

あれは何？

ああ、私を追ってくるイレギュラーね・・・

私はここで死ぬのかしら・・・

誰か私にチャンスを下さい・・・

この力を使って守れるように

そして理想郷（ユートピア）を作ることのできる未来を作るために・・・

私の役目を果たすためにも・・・

ああ、製作者様・・・なぜ貴方は私にこんな力を与えたのですか？

そして何故、私をプロトタイプとして作ったのですか？

第1話 出会い

??? 「ここまでかなあ……」
ダンッ!!

エックス 「少女型!?なんでこんなところに……」

ゼロ 「お前、俺たちの間に入れ!!」

??? 「え?でも……」

エックス 「早くっ!!」

??? 「は、はい!!」

アクセル 「こいつら、いつものイレギュラーよりも強い!」

エックス 「これじゃ、きりがいな……」

??? 「みなさん、離れていて下さい。私がやります。」

アクセル 「え!?君が!」

??? 「早くして下さい!!」

エックス 「ああ、分かった!!」

アクセル 「エックス!」

ゼロ 「あの女、ただ者じゃなさそうだしな」

アクセル 「分かったよ」

??? 「ありがとうございます」

??? 「もう、いい加減、諦めてくれないかしら?イレギュラーたち?

私に殺されたいなら別だけど」

??? 「グランドクロス!!」

ゴオオオオオ (竜巻の起こる音)

3人 「……」

??? 「……使っちゃった……。イレギュラー認定されないといいな……」

アクセル 「すごいね、君!!名前何?」

??? 「私ですか?私はシエラです」

アクセル 「シエラか。あ、僕たちには敬語使わなくていいよ」

シエラ 「うん。エックス、ゼロ、アクセル」

エックス 「何で、俺たちの名前を?」

ゼロ「それに、シエラといったか・・・固体認識番号がない・・・」
アクセル「えっ!?ほんとだ・・・」

エックス「ベースまで一緒に来てもらえる?」

シエラ「・・・はい」(大事になっちゃったなあ・・・)

第2話 ハンターベース

シエラ「ここがハンターベース……」

シグナス「うん？その子が現場にいたレプリロイドか」

エックス「ああ」

シエラ「私を……イレジュラーハンターにしてもらえませんか？」

エイリア「駄目だわ……。いくら探してもこの子に関するデータが何一つないわ……」

アクセル「そんなことあるんだ……」

シグナス「データがないし、少女型を戦わせるわけには……」
スツ

シエラ「それでも駄目ですか？」

アクセル「ボディの色と目の色が変わった……」

ゼロ「その姿は？」

シエラ「アクセルさんで言うDNAチエンジみたいな能力です」

ブンツ（セイバーの振り落とされる音）

エックス「ゼロ!?何を!？」

ゼロ「何故避けなかった？」

シエラ「本気じゃないって分かってたからです。先ほどの戦いの時に比べてスピードも少し遅かったですし」

ゼロ「よく分かったな。……お前戦闘型だろう？」

みんな「え!？」

シエラ「よく分かりましたね」

シグナス「戦闘型ならいいか……」

エイリア「じゃあ、所属は……」

シグナス「第0特殊部隊でどうだ？その能力が使えるかもしれんな」

ゼロ「……分かった」

シエラ「よろしくお願いします。ゼロさん……あ、ゼロ隊長」

ゼロ「ゼロでいい……。あと、敬語もなしだ」

エックス「俺も、さんはなくていいし、敬語じゃなくていい」

アクセル「無論、僕もね」
シエラ「はい・・・じゃなくてうん。よろしくね、ゼロ、エックス、
アクセル

第3話 ランク決め

アクセル「ハンターランクはどうするの?」

エックス「A級は確実だと思う」

ゼロ「S級かA級か・・・といったところか・・・」

エイリア「でも、前A級のプログラムが壊れちゃって、まだそのままの・・・」

ゼロ「・・・じゃあ、S級を受けてもらおうか」

「テスト終了後」

エックス「・・・」

ゼロ「・・・」

アクセル「・・・」

シグナス「・・・」

エイリア「・・・」

レイヤー「・・・」

パレット「・・・」

シエラ「え?え?」

アクセル「S級を満点なんて・・・」

シエラ「え・・・簡単だったよ?」

みんな「・・・」

シエラ「あ・・・イレギュラーに5年ほど追われていたもので・・・」

ゼロ「何故だ?」

シエラ「えつと・・・いつか話すわね」(ニコツ)

アクセル「うん、また教えてね。」

第4話 彼女の実力

エイリア「シエラの実力が知りたいわね・・・」

シエラ「いいですよ」

アクセル「満点だったんだし、僕たち3人でもいい？」

ゼロ「俺もか・・・」

エックス「俺まで・・・」

シエラ「私はいいわよ」

トレーニングルーム

シエラ「じゃあ、はじめない？」

アクセル「手加減はしないからね」

シエラ「もちろんいいわよ」

エイリア「始め！」

アクセル「やあっ！」

ダンッダンッ

シエラ「ハッ」

ガキンッ

エックス「バリアか!？」

シエラ「そうよ」

ゼロ「これならどうだ？」

ガキンッ

シエラ「クッ・・・でも・・・やあっ！」

ゼロ「グワッ」

エックス「ゼロ！」

シエラ「他人の心配より自分の心配をしたら？」

3人「怖ッ・・・」

シエラ「イオナズンっ！」

チュードーン

アクセル「うっ」

エックス「・・・強い・・・」

ゼロ「・・・何故本気で使わない!？」

シエラ「本気で使ってもいい？どうなっても知らないけど・・・」
3人「ああ／うん」

シエラ「じゃあ、本気でやらせてもらうわね」

シエラ「フレアッ!!」

チュードーン!!

3人「ぐっ」

エックス「本気・・・勝てそうにないな・・・」

ゼロ「やるか？」

エックス「ああ」

エックス&ゼロ「ファイナルストライクっ!!!」

ドツカーン!!!

シエラ「ツ・・・やるわね・・・」

アクセル「うそ!?あれを食らって立ってられるなんて!？」

シエラ「私の番よ!ミィティア!!!」

ドツカーン!!!

3人「・・・」

シエラ「やりすぎた・・・」

くメンテナンスルームく

シエラ「ごめん・・・大丈夫？」

ゼロ「ああ」

エックス「すごく、強いね」

アクセル「すごい・・・としかいえないよ・・・」

第5話 初めてのイレギュラーハント・・・

エイリア「エリア〇〇でイレギュラーが発生したわ!」

エイリア「エックスとゼロとアクセルとシエラで行ってもらえる?」

エックス「分かった」

〜現場〜

シエラ「・・・意外と少ないのね・・・」

アクセル「ええ!?!ぎつと300体はいるのに!?!」

シエラ「だって、私この倍の量のイレギュラーに追われてたもの」

3人「・・・」(ゾクツ)

エックス「大丈夫だったの?」

シエラ「ええ。」

ゼロ「すごいとしかいえんな・・・」

エックス「ほんと・・・よく生きてたよね、シエラ・・・」

シエラ「そう・・・?さて、イレギュラーには、消えてもらわないとね?」

3人「・・・怖い/怖いな・・・」

シエラ「?フレアツ」

チュードーン

シエラ「ぎつと100体は倒したし・・・」

ビュンツ

アクセル「え!?!弓ツ?」

シエラ「追加効果で麻痺にできるわ」

ゼロ「動力炉を破壊か・・・」

エックス「あんまり、追加効果の意味ないよね・・・」

シエラ「・・・誰!?!」

???「やっぱり気付いてるんだ」

シエラ「あたりまえよ」

???「でも、あまり私と話してると私の可愛い子たちが、みんなを殺しちゃうわよ?」

シエラ「そうね。ミーティア」
ヒュー!!ドツカーン!!
みんな「・・・」
シエラ「これでいいでしょう」
???「そうね・・・」
ゼロ「貴様は誰だ？」
???「私は・・・そうね、リル、とても名乗っておくわ」
エックス「名乗っておく？」
リル「ええ。私に名前なんて、ないもの」
シエラ「・・・?ああ、思い出した」
リル「言わないでよ」
シエラ「言ったらあれでしょう・・・」
リル「もちろん」
???「シエラ、リル、そこまでにしなさい」(ホログラム)
シエラ&リル「貴女はDr.セ・・・」
???「いわないで」(ホログラム)
エックス「シエラ、彼女は？」
シエラ「いつか話すわ」

第6話 シエラの秘密？

くハンターベースく

エイリア「・・・どうしてこんなに帰るのが遅いの!？」

エックス「それはっ・・・」

エイリア「100文字以内で答えて」

4人「・・・」(焦り)

エイリア「はぁ・・・なんで隊長2人もいるのに・・・しかも全員S級ハンターで・・・」

4人「ごめん・・・／すまん・・・／すみません・・・」

シグナス「・・・ところでシエラのボディは何で出来ているんだ？」

シエラ「はい？何故急に？」(助かった・・・)

シグナス「破損した時に金属がいるだろう？」

シエラ「確かにいりますね。チタニウムXZ合金です。」

エイリア「聞いたことないわ・・・」

シエラ「とても珍しい金属ですから」

ゼロ「人工的に作ることは出来ないのか？」

シエラ「X合金とZ合金を上手く混ぜればできるわ」

アクセル「わく高度な技術がいるんだね」

エックス「原動力は？」

シエラ「自然エネルギーよ」

シエラ「太陽光とか風とか・・・」

エックス「便利だね・・・それ」

エイリア「そうだ、4人とも今回の任務の始末書書いてね。」

4人「ああ・・・／はい・・・／分かりました」

エイリア「期限は明日までね」

4人「えー!？」

第7話 シエラの戦う理由

アクセル「そういえば、シエラは何で戦うの？」

シエラ「戦闘型だから・・・じゃ駄目？」

アクセル「うん。駄目」

シエラ「アクセルの意地悪・・・」

ゼロ「そんな隠すことでもないだろう」

エックス「そうだよ。仲間なんだし・・・それに手伝ってあげられるかもしれないよ？」

シエラ「・・・お人よしなヒト。」

アクセル「僕たちだってハンターだからね。まあ、エックスが優しすぎるだけかもしれないけどね」

エックス「ア・ク・セ・ル？」（怒）

アクセル「だってほんとじゃん」

ゼロ「・・・そこまでする。シエラ、早く言え」

シエラ「それは命令ですか？隊長？」

ゼロ「・・・ああ」（嫌味かコイツ・・・）

シエラ「はくい。そうねえ・・・イレギュラーに追われていたときの借りを返す・・・」

エックス「・・・他にあるんでしょ？そうねえ・・・って言うくらいだし」

シエラ「・・・理想郷（ユートピア）が作れるような平和な未来を作るの」

エックス「理想郷（ユートピア）か・・・」

シエラ「天国（ヘブン）でもいいけどね」

アクセル「人間とレプリロイドが仲良く暮らせる世界？」

シエラ「ええ」

ゼロ「理想郷（ユートピア）や天国（ヘブン）なんて幻だろう」

シエラ「ええ。でも私は実現させなければいけないの」

ゼロ「・・・」

シエラ「レプリフォースみたいなことはしないわ」

ゼロ「・・・本当にか？」

シエラ「ええ。カーネルさんや、アイリスさんみたいなことはしないわ」

アクセル「絶対だよ？」

エックス「本当に？約束だよ？」

シエラ「ええ」

シエラ「それに私まであなってしまったら、私が作られた意味が無くなってしまうもの」

3人「？」

第8話 いろいろな魔法？

エックス「そういえば、シエラ」

シエラ「何？」

エックス「1つ聞きたいことがあるんだけど・・・」

シエラ「うん」

エックス「ミーティアって敵だけに効くの？」

シエラ「うくん・・・。まあそうだね」

ゼロ「自分が敵と認識したものだけか？」

シエラ「よく分かったね」

アクセル「すごいっ!!」

エイリア「傷ついたレプリロイドを癒す魔法はないの？」

シエラ「あります。」

エイリア「あ、私に敬語使わなくてもいいわよ」

シグナス「私もなくていい」

シエラ「分かったわ」

エックス「どんなの？」

シエラ「いろいろあるから・・・」

エイリア「・・・！エリア○○でイレギュラーが発生したわ！」

レイヤー「負傷したレプリロイドもいるみたいです」

シグナス「エックス、ゼロ、アクセル、シエラ、頼む」

4人「分かった／うん／ええ」

第9話 リルの目的

リル「アハハハッ！消えちやえっ!!」

エックス「リル、やめろ!!」

リル「うるさいわね。あんたも死ね」

ダンッ!!

エックス「ウワアアア!!」

アックス「エックス!？」

シエラ「君もウザかったんだよね……。消えて?」

フワアアア!! (魔力の集まる音)

シエラ「そんなことさせさないわ!!マホトーンツ!!」

パンツ (集まった魔力が消える音)

ゼロ「シエラが2人?」

リル「フフフツ。こっちのシエラはコピーだもの」

コピーシエラ「私(オリジナル)……。邪魔よ?」

リル「私達の邪魔をしないで?」

コピーシエラ「シエラを殺しちやおう?リル」

リル「そうね、コピーシエラ」

リル「デスツ!!」

ブワツ!!

シエラ「……。」

リル「効かないの!?死の霧なのに!？」

シエラ「オリジナルを甘く見ないでよ……。」(怒)

シエラ「リルもコピーも私のコピーボディーを使ってるのにつ!!」

リル「黙れ!!貴様が死ねば私がオリジナルになれるのよ!!」

コピーシエラ「オリジナルのシエラだけの特権……。」

リル&コピーシエラ「世界を好きなようにつくりかえられるもの!!」

シエラ&リル&コピー以外「なんだって!？」

リル「世界の掟も何もかも……。それこそイレギュラーだってね」

シエラ「でも、貴女も知っているでしょう?それは己の身を滅ぼす

のよ?。」

コピーシエラ「それでも私達は構わないもの。そうしなければ、私達が作られた意味は無くなってしまう……。私達が死ねばシエラの作られた意味は……」

リル「コピー、喋り過ぎよ。」

コピーシエラ「……。そうね……。マヌーサ」

モワソン（霧が出で来た）

シエラ「幻の霧（マヌーサ）か……。じゃあ私は、マホカンタツ!!」

シユワンツ!!（魔法の壁が出来た）

リル「……。今度は殺すからね……。シエラ」

シエラ「殺せるものならね……」

シエラ「じゃあね……。リル……。いえ、私。」

リル「!?!? 貴女あのことを!?!」

シエラ「ええ。もちろんよ」

シエラ「なぜ、私（オリジナル）にこだわるの？ 貴女も私（オリジナル）なのに」

リル「これでシエラなんていえないわ」

シエラ「私なんかよりも、貴女のほうが私の本当の使命を果たして
るじゃない」

コピーシエラ「オリジナルの貴女には分からないわ。」

リル「行きましょう。コピー」

コピーシエラ「そうね、リル」

シユン!!

エックス「どういうことなんだ……。？」

ゼロ「リルはコピーボディーを使っている……」

アクセル「どうしてリルもオリジナルなの？」

エイリア「リルがコピーボディーなら、リルはオリジナルじゃない
はずなのに……」

シグナス「どういうことなんだ……。？」

第10話 2人のオリジナル？

くハンターベースく

エイリア「どうということなの、シエラ!？」

アクセル「そうだよ!!」

ゼロ「シエラもリルもオリジナル?」

エックス「教えてもらえるかい?」

シエラ「……」(困惑)

シグナス「まあまあ、シエラが困ってるじゃないか。」

エイリア「でもシグナス……」

エックス「……まあ、でもシエラにも言いたくないことくらいはあると思うから……」

ゼロ「ああ……強制は出来ないな。」

アクセル「でも、言ってくれとうれしいな。」

シエラ「……。ええ、分かったわ。貴方達に隠し通すのは無理みたいだしね。」

エックス「まあ、伊達に長い間ハンターやってる訳じゃないからね。それくらいは、ね」

ゼロ「そういうことだ。」

シエラ「そうね……。私はね、オリジナルのボディを使っているの。」

シエラ「でも、リルはね、はじめに作られた私になるはずだった人格プログラムを搭載しているの。」

エックス「オリジナルの人格ということかい?」

シエラ「ええ……。私の今の人格はその次に作られた人格よ。」

ゼロ「だから、2人ともオリジナルか……」

第1話 リルとシエラの関係

エックス「でも、オリジナルの人格ならシエラに……」

シエラ「あ、それはね、接続の関係でね？」

案外簡単な理由だったことと、シエラとリルも2人ともオリジナルという現実には少し沈黙していた。

ゼロ「だが、リルはヒトを殺すことを楽しんでたぞ……？」

ゼロの疑問はもつともだった。シエラは少し俯き、考えてからいった。

シエラ「……私の製作者はね、平和を手に入れるのには悪を倒すことが必要があると考えたの」

アクセル「確かに悪は必要だね」

シエラ「私は悪役になるために作られたの。」

エックス「でも、その人格はリルに行った……？」

シエラ「ええ。だから私は処分されるはずだった。」

エイリア「……はずだった……？」

シエラ「ええ。でもリルの人格プログラムはね、当初の人格よりも悪い人格になってしまったの……。」

アクセル「え……？」

ゼロ「憎悪か何かか？」

シエラ「そう……。始めはそうでもなかったんだけどね……」

エックス「じゃあ、もしかして……？」

シエラ「ええ。私はリルを止めるために、処分されずに、ね」

シエラが少女型の戦闘型レプリロイドに生まれたのには、そういう理由があった。そしてリルは悪役として作られたのだった。

シエラ「でも、リルが私達の予想以上に強くなっている……。止められるかどうか……」

エックス「大丈夫。絶対にみんなでリルを止めよう」

シエラ「ありがとう……。」

第12話 シエラのことについて

エックス「でも、どうしてそんなことを知っているんだ？」

と聞いたエックスにシエラは

シエラ「製作者がそういう情報を入れてくれたからよ。」

ゼロ「製作者の名前は？」

シエラ「・・・Dr. セリアっていうの。」

シエラの言葉に皆は沈黙した。データベースからセリアについて調べているのである。

エックス「セリアなんて載ってないな・・・。」

ゼロ「ああ・・・」

シエラ「Dr. セリアはDr. ライトの親戚だつてセリア博士から聞いたわ。」

エックス「ライト博士の？」

シエラ「ええ」

ゼロ「聞いたというと・・・？」

ゼロ達はライト博士の親戚なら100年ほど前の人、ということになるため、不思議に思っていた。シエラは答えた。

シエラ「起動して間もないころね」

アクセル「え？1回封印されたの？」

シエラ「いいえ。今までずっと生きてきたわ。」

シエラの言葉に皆びっくりしていた。

アクセル「旧型の旧型・・・？」

シエラ「そうよ。2世紀くらい前の新世代型だつたわ。」

エックス「でも、ほとんどのレプリは俺を基にして・・・」

エックスはシエラに聞いた。彼女は答えた。

シエラ「私はライト博士とワイリー博士がエックスとゼロを作るより前に、セリア博士に作られたの」

アクセルが小声で「わく僕達みんなのお母さん・・・？」と言つたらエックスとゼロに同時に軽く叩かれた。ゼロは「KYだな・・・。」といい、エックスは「シエラが傷つくぞ・・・。」と言つていた。

アクセセル「……地味に痛いよ……。」

ゼロ「シエラ、リルは？」

シエラ「リルは私の次。エックス、ゼロの少し前に完成したわ。」

また、アクセセルが「リルもお母さんなの!？」と言ってまた、2人に軽く叩かれていた。エックス、ゼロはため息をつきながら。シグナスたちは苦笑していた。シエラは、「私……イレギュラーの親……？」(泣) などと言っていた。

エックス「シエラ……。アクセセルが悪いから気にしないでくれ……。」

シエラ「ええ……。そうすることにするわ……。」

ゼロ「……リルも、か」

シエラ「ええ。あと私の前に姉さんが3人。」

エイリア「名前は？」

シエラ「1番上がレア姉さん。次がファイアナ姉さんで、次がミルファイ姉さん。」

シエラ「ちなみにコピーもセリア博士に作られたわ。」

みんなコピーシエラも、ということにびっくりしていた。

シエラ「昔は私達もセリアナンバーズとして固体認識番号を持っていたわ。」

アクセセル「じゃあ、どうして今はないの？」

シエラ「新セリアナンバーズと旧セリアナンバーズに別れた時に無くなったの」

シグナス「新セリアナンバーズ……？」

シエラ「私、リル、コピーのことよ。」

皆はナンバーズが2つもあることにびっくりしていた。

エックス「じゃあ、旧セリアナンバーズは……」

シエラ「レア姉さん、ファイアナ姉さん、ミルファイ姉さん。」

ゼロ「ナンバーズが2つか……」

シエラ「……それに昔は、姉さん達とバウンティーハンターをしていたの……」

シエラの発言にまた、驚いていた。

アクセセル「え!?!シエラが？僕たちみたいに!?!」

シエラ「ええ」

エックス「組織だったのか・・・？」

エックスが声色を変えて言った。

シエラ「ええ」

ゼロ「組織名は・・・？」

ゼロが低い声で聞いた。

シエラ「今は白い翼（ホワイトウィング）って言う組織名よ。前は、飛ぶ鳥（フライバード）って名前だったわ。」

アクセル「フライバードって・・・!？」

シグナス「・・・ああ、かつてほかのバウンティハンターも殺していた組織だ」

エックス「・・・君も殺したのかい・・・？」

シエラ「いいえ。私が殺したのはイレギュラーだけよ。」

ゼロ「だが今ホワイトウィングというと・・・」

エイリア「ええ。稼いだ賞金を人間達に分けてるわよね・・・」

皆はそのまるで正反対の組織が同じだと言うことに困惑していた。

シエラ「フライバードは全セリアナンバーズで結成されていたの」

アクセル「じゃあ、ホワイトウィングは・・・？」

シエラ「リル、コピーを除くナンバーズで結成されているわ」

ゼロ「なるほどな・・・」

エックス「フライバードを指揮していたのは・・・？一番上のレア、と言うレプリカか？」

シエラ「いいえ。レア姉さんじゃないわ。・・・リルよ。逆らおうとすれば逆に操られるの。ただ、私も操れるから、リルのは効かないだけよ。」

第13話 予感

エイリア「イレギュラー多数確認!!嘘・・・!!」

エックス「こんなに・・・!!」

エックス達は唾然としていた。

エイリア「嫌な予感がするわ・・・」

ゼロ「だが、こんなにどうする・・・？」

そういうゼロにシエラが

シエラ「いいえ。ここを叩けばいいのよ。」

そう彼女は言い、砂漠を指した。

ゼロ「分かった。行くぞ!!」

そう言い、彼らは砂漠へ向かった。

く砂漠く

アクセル「イレギュラーがこんなに・・・!!」

シエラは何かを唱え、言った。

シエラ「いいえ。これは幻に過ぎないわ。」

素晴らしい、指を「パチン」と鳴らした。

エックス「なっ・・・」(唾然)

イレギュラーたちは一瞬にして消えた。

シエラ「出てきて?レア姉さん達。そこにいるのは分かってるんだから。」

レア「よく分かりましたね。いつからですか?」

シエラ「初めからよ。何をしにきたの?リルやコピーが居るのを見る限り、こちらの仲間ではないみたいだもの」

ファイナ「それはですね・・・」

ミルファイ「貴女を迎えに来たのよ、シエラ。ねえ、セリア様。」

ローブをはおり、顔を隠したセリアナンバーズの後ろから1人の女性が出てきた。

セリア「そうよ。さあ、おいで、シエラ・・・」(微笑)

第14話 裏切り

セリア「シエラ、貴女の力は私達に必要なの。だから貴女はこっちよ……？」

バチッ!!

セリアの指から紫電がほとぼしった、そしてシエラに直撃した。

シエラ「キヤアアアアアアアアアアアアア!!」

エックス「シエラ!!」

レア「もう遅いのです。シエラは私達の仲間になるんですよ」

シエラ「……」

目を開いたシエラの瞳には先ほどのような光は無く、濁っていた。よく見れば、ナンバースはリルとコピーシエラ以外がシエラと同じような瞳をしていた。

セリア「シエラ……？」（微笑）

シエラ「……Drセリア、何でしょうか？」

セリア「クスクス……。皆でもう一度飛ぶ鳥（フライバード）を作るんですよ。」

セリアナンバース「了解……」

セリア「じゃあ、シエラ。はじめにあの子達を殺してきて？」

シエラ「分かりました。」

そういつて、彼女はエックス達に何の躊躇いも無く剣を向けた。

エックス「やめろ、シエラ!!」

エックスが悲痛な声で叫んでも彼女には届くことは無かった。

アクセル「そうだよ!!僕たちだよ!!」

アクセルが叫んでも彼女は聞く耳を持たない。そして彼女は

シエラ「……任務開始」

ただ淡々と任務をこなすだけの機械と化した。

エックス「……俺達の声はもう届かないんだな」

ゼロ「ああ、そうみたいだな」

アクセル「シエラもナンバースたちも瞳が濁ってたしね……」

そう彼等が話していると

シエラ「目標エックス、ゼロ。ブリーズダスト発動まで残り20秒」
彼女は無機質な感情のこもっていない声でそういった。

アクセル「うわ……。発動まで……。とか言われても困るだけ
なんだけど……。」

??? 「とりあえず、射程距離より遠くに行って下さい!!」
そう背後から少年の声でした。

第15話 少年

背後に立っていた少年は銀髪で蒼い瞳を持っていた。

アーマーは肩のところにかついておらず、ローブのような服にブーツ、という格好だった。・・・非戦闘型にしか見えないレプリロイドに縁があるな・・・俺たちは・・・。

「君はいつたい!?!」

そう叫ぶ俺。

「僕のこととは後ほど。今は彼女をどうにかしないといけませんからね、エックスさん。」

そう彼は俺のほうを向いていい、シエラがいる方向を向いた。

「姉さん・・・。貴女まで・・・。」

彼は悲しげな目をしてシエラを見た。

「Dr. SN000カノン。敵と認識。排除を開始します。」

シエラは抑揚のない声でそう言い、剣を構えた。

「姉さんがそうするなら・・・。」

カノンと呼ばれた少年も剣を構えた。

「カノン・・・!?!」

「大丈夫ですよ、エックスさん。」

そうカノンは俺の方を向き微笑んで言った。

「でも今のシエラは普通じゃないんだよ!?!」

そう離れたところから叫ぶアクセル。

「僕は姉さんたちが堕ちたときのために作られたんですから。」

彼はそう言い微笑みながら、

「ここは僕に任せてください」

そう彼は言った。

「わかった。」

「ゼロ!?!」

アクセルがそういった。ゼロがそう思うなら・・・。

「俺も・・・。彼を信じるよ。」

そういうとカノンは笑顔を見せた。

するとシエラが痺れを切らしたのか斬りかかってきた。
ガキン!!

「!?いきなりすぎません．．．!?姉さん!!」

「ぐちやぐちやうるさい．．．。黙れ。」

「あ、はい．．．。って何従っちゃってるんだろう!?!」

そんな彼をみて俺たちの不安は募るばかりだった。

とはいえ彼の戦闘能力は高かった。

「ミーティア。」

そうシエラが何の前触れもなく呟いた。

すると、宇宙から大量の隕石が落下しはじめた。

そう。メテオの何倍もの量が．．．。

「．．．僕、ミーティアをシエラに使われるイレギュラーの気持ちがかかった気がする．．．。」

とアクセル。

「俺もだ．．．。」

「俺も．．．。」

と俺とゼロ。

しかしカノンはというと．．．。

「．．．。」

慌てることも、焦ることもなく静かに瞳を閉じていた。

そして彼が目を開きながら何かを呟いた。まったく知らない言語だった。

「止まった!?!」

とアクセル。そう、落下していた隕石がなぜか停止した。いや：。俺たち以外のものがすべて止まっていた。強く吹き付けていた風も．．．。巻き上がる砂も．．．。すべてが止まっていた。

「何故お前がその力を．．．。」

そう呟くシエラ。そんなシエラに彼は

「彼女が何の工夫もしていないと思いませんか?姉さん．．．。」

そうカノンが言うとシエラは眉間にしわを寄せて

「チツ．．．。こちらシエラ．．．カノンの乱入により任務遂行が不

可能になりました……。」

「分かりました。テレポートしてください。」

という会話が聞こえた。

「了解。申し訳ありません……。」

そう呟きシエラはテレポートに入った。そして……

(お願い……。私を止めて……。)

そう4人の頭に直接シエラの声が響いた。

第16話 ナンバーズの秘密

シエラが退却した後、残った4人はエイリアに連絡を取っていた。「こちらエックス。エイリア、転送を頼む。」

「了解。転送!!」

彼らを光が包んだ。次に彼らが目を開けるとそこはハンターベースだった。

「エックス、彼は・・・？」

聞いたのはエイリアだ。

「彼はカノン。シエラの姉弟機らしい。」

「カノンです。姉さん達が御迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。」

「いや、君が謝る必要はない。元凶はDr. セリアだ。」

頭を下げて謝った彼にシグナスはそう返した。

「・・・ありがとうございます。」

そういった彼の瞳には深い悲しみの色が浮かんでいた。

「先ほどお前が言っていたシエラ達が堕ちたときのために作られたというのはい体・・・？」

「言葉通りですよ、ゼロさん。僕はどんな手段を使っても姉さんたちを止めなければいけないんです。」

「どんな手段を使っても、か・・・。」

エックスが呟く。

「はい。・・・とはいっても僕も気を抜いたら、リル姉さんに操られてしまいますが・・・。」

「そうか・・・。」

「自動時に意識共有をカットできればいいのですが・・・。」

カノンが苦笑して言った。

「意識共有をしているの？」

「はい・・・。僕たちナンバーズは普段から意識共有はしていたんです。」

ですがリル姉さんが狂ってしまった日以降は彼女から流れ込んでくる破壊衝動に飲み込まれてしまうので、意識的にカットしています。」カノンが皆に話した。

「ですからいざれ姉さんたちと戦う日が来ると思いますが、気をつけてください。．．．姉さんたちの連携は隙がほとんどありませんから。．．．僕でも破れるかどうか。．．．」

「厄介だな。．．．」
そうゼロが呟く。

「それでも僕は姉さんたちに勝つしかないんです。．．．世界を守るために。．．．」

カノンは目を閉じて呟いた。

「大丈夫、俺たちならやれるさ。」

エックスが励ます。

「そうだよ！僕たちならできるよ！」

アクセルもカノンの肩を軽く叩いて言う。

そしてゼロも無言で力強く頷く。

「．．．まずは姉さんたちがいそうなところを探していきます。」

彼らの励ましを受け取ったカノンはそういった。

「目星はついているのか？」

「．．．ええ、一応。．．．このデータを見てください。」

とカノンは皆にデータを送った。

「このデータは？」

「かつて僕たちの拠点があった場所です。装置などもそのままになっていますから、いるとしたらこのうちの何処かでしょう。．．．最も有力なのはここです。」

と彼は言い、ある場所を指した。

「．．．砂漠か。」

「ええ。ここが一番大きな拠点でしたから。ここにいる可能性が一番高いでしょう。」

「よし、いまから準備をしよう。．．．5時間後にここに集合でいいな

？」

とシグナスが聞く。

「ああ／うん／はい」

「よし、解散！」

彼らはセリアナンバーズを倒しに行くことを決めた。

第17話 セリアナンバーズ

今、俺達は砂漠に来ていた。カノンが言うにはこの砂漠にある拠点にいる可能性が一番高いそうだ。カノンを先頭に暫く歩き続けていると、砂漠には不似合いな研究所のような施設が見えてきた。

「あれがそうなのか？」

ゼロがカノンに聞いた。

「ええ。．．姉さん達のことですから、もしかしたら．．．」

彼はそう呟く。

「それはどういう意味だ．．．？」

俺がそう聞いた直後、俺達の間を一筋の閃光が走った。

「流石ですね．．．。来ると思っていました．．．カノン。」

コバルトグリーン色の長髪の少女型レプリロイドが言った。

「レア姉さん．．．。」

カノンが呟く。

「イレギュラーハンターの皆さんも私達を倒しに来たのでしょうか？」

そう俺達に問いかけたのはオリオンブルー色で内巻きの髪が特徴の少女型レプリロイド。

「それ以外でここに来ることはないと思うわ、ファイアナ姉さん。」

ファイアナに返したのはコーラル色の髪をおさげにした少女型レプリロイド。

「私もそう思うわ．．．。ミルファイ姉さん。」

そう言いながら施設から出てきたのは．．．シエラ。

「シエラ．．．？」

アクセルが恐る恐るといった感じで声をかける。

「エックス、ゼロ、アクセル、カノン．．．久しぶりね。」

「え!?シエラ．．．!？」

「支配を脱したのか．．．？」

「．．．お久しぶりです、姉さん。」

彼女との会話が成り立っていることに驚いた俺達は思わずそう聞

いていた。．．．いや、一名挨拶を返しているが。

「．．．いいえ。」

彼女は頭を振りながら答え、自身の腕輪を指でさした。

「これでD r. セリアは私達を好きに操れるのよ．．．。」

「．．．彼女の好きなタイミングでスイッチをいれるのです。」

ミルファイとレアが教えてくれた。

「．．．D r. セリアが私のスイッチを入れたようです。早く逃げて下さい。私のこの能力は．．貴方達．．の．意．．識を．．．。」

ファイアナがそう警告し、発動するであろう能力を教えてくださいようとした矢先、彼女の瞳から光が失われていく。シエラ達はD r. セリアからの帰還命令が出たのだろうか。意識を奪われ、俺達を傷つけたこと、これからも傷つけてしまうだろうから、と謝りながらまた施設の中へと消えていった。．．．本来の彼女達は他人を傷つけることを嫌うようだ。

「．．．ごめ．な．．い．．．。」

ファイアナも薄れ行く意識の中、おそらく謝ろうとしたのだろう。言い終わると同時に彼女が俺達のほうに手をかざし、何かを呟いていた。

それを聞くと同時に俺達の意識は薄れていった。